

2020年10月11日（日）「一時的な所有物」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 5:12-16

- 12 太陽の下で私は痛ましい不幸を見た。  
富を蓄えても、持ち主には災いとなる。
- 13 その富はつらい務めの中で失われる。  
子が生まれても、その手には何も無い。
- 14 母の胎から出て来たように、人は裸で帰って行く。彼が労苦してもその手に携えて行くものは何も無い。
- 15 これもまた痛ましい不幸である。人は来たときと同じように去って行くしかない。人には何の益があるのか。それは風を追って労苦するようなものである。
- 16 人は生涯、食べることさえ闇の中。いらだちと病と怒りは尽きない。

《新改訳 2017》伝道者の書 5:13-17

- 13 私は日の下に、痛ましいわざわいがあるのを見た。所有者に守られていた富が、その所有者自身に害を加えることだ。
- 14 その富は不運な出来事で失われ、息子が生まれても、その者の手もとには何も無い。
- 15 母の胎から出て来たときのように、裸で、来たときの姿で戻って行く。自分の労苦によって得る、自分の自由にすることのできるものを、何一つ持って行くことはない。
- 16 これも痛ましいわざわいだ。出て来たときと全く同じように去って行く。風のために労苦して何の益になるだろうか。
- 17 しかも、人は一生、闇の中で食事をする。多くの苛立ち、病氣、そして激しい怒り。

## 【序論】

私たちの現実生活に伴うお金に関する話題がしばらく続きます。以前にお伝えしましたように、5:7 から 6:12 までを7回に亘ってこのテーマで語っていく予定です。今回は「富に伴うリスク」についてお話しさせていただきました。富は、持てば持つほど管理が難しくなるもので、無制限に求め続けると終わりのない旅を続けることになる。だから、何にどれだけ必要なかを明確化し、自分の人生の使命に集中すべきであるということ学びました。

今日は「リスク」を更に超え、富がもたらす「災い」について語られています。これは、少額であってもお金を持ったことがある人なら、誰でも経験してきていることでしょう。小学生であっても、お金を持つようになると必ず嫌な思いもするようになります。その理由は、お金とは常に誰かに狙われている（誰もが欲しがっている）からではないか。恐喝されたり、騙されたり、いろいろな方法でお金は失われる可能性がある。保有する喜びと、失う悲しみの両面が「お金」にはあるのです。

## 【本論】

### 本論A. 災いをもたらす富

太陽の下で私は痛ましい不幸を見た。富を蓄えても、持ち主には災いとなる。(5:12)

「太陽の下」という表現を、今日は敢えて「富が支配する世界」と言い換えてみましょう。以前にマタイ 6:19-24 を扱った際に、富は神に置き換えられてしまう危険性のあるものだということを学びました。経済中心に動くこの世界の現実とは、実はそういうものなのかもしれません。ギリシャ語で「富」は「μαμωνάς/マモーナース」と言いますが、そこから富の神「マモン」という言葉が生まれました。

『富』というのは非人格的存在でありながら、ここでは神と同格に置かれていて、人を支配する存在のように描かれています。それだけに『富』は偶像となり、崇拜の対象となりやすい。そして、人は『富』に仕え始めると、神に仕えることができなくなると言われています。<sup>1</sup>

「痛ましい不幸<sup>2</sup>」という表現は、原文では「רעה חולה/ラーアー・ホーラー」で、「痛ましい」(ホーラー)という部分の原意は「病気になる」です。金銭トラブルは人に大きなストレスを与え、それによって病気になることもある。ネットショッピングが便利な時代ではありますが、詐欺も多く、購入した商品が届かないという話も珍しくありません。そのような状態は消費者に不安を与え、頭の中はそのことで占められてしまう。また、オレオレ詐欺などによって莫大な財産を奪われてしまった方の悲しみは、まさに健康を損ねるほどの二次被害をもたらすでしょう。

その富はつらい務めの中で失われる。(5:13a)

「つらい務め」と訳された部分は、原文では「רעוּן רעוּ/ベインヤーン・ラー」で、直訳すると「悪しき労苦」となります。新改訳もフランシスコ会訳も「不幸な出来事」と訳しています。ニュアンスとしては、何らかの不幸によって財産を失うことを言い表しているでしょう。その状況は敢えて特定されておらず、読者の経験に照らし合わせて判断することが求められています。聖書の中で多くの財産を失った人物としては、やはりヨブが思い浮かぶでしょう。彼は屈指の富豪でありましたが、度重なる災難によってすべての財産を失いました。それは、強奪と天災によるものでした。人間の一般的な傾向として、強奪や詐欺による損失による怒りの向く方向は人間(加害者)であり、自然災

---

<sup>1</sup> 2016/4/24 マタイ福音書 6:19-24 (その2) 「あなたはどちらにつくか」

<sup>2</sup> 「悲しむべき悪」(口語訳)、「痛ましいこと」(新改訳第三版)、「痛ましいわざわい」(新改訳2017)、「大きな不幸」(新共同訳)

害による損失による怒りの向く方向は（他に向けるところがないので）神になるのではないか。多く所有しているほど、失う悲しみも大きくなります。はじめから持っていない人にとっては、失うものがないので、悲しみはさほどではありません。そう考えると、多くを持つことは常に大きな悲しみと背中合わせということになるでしょう。

**子が生まれても、その手には何もない。（5:13b）**

親は子どものためにお金を用意し、子どもに良い教育を受けさせてあげたいと願います。しかし、財産を失うとそれもできなくなってしまう。これが、この不幸な状況におけるネガティブな側面としての頂点をなしています。

## 本論 B. 一時的な所有

**母の胎から出て来たように、人は裸で帰って行く。彼が労苦してもその手に携えて行くものは何もない。（5:14）**

これまでに語られてきた「痛ましい不幸」の最終的帰結が「死」です。地上にあって一生懸命蓄えた富は、その人の死とともに関係が切れます。死後の世界には何一つ持っていくことはできない。このテーマは既に繰り返し語られてきた内容ですが（例えば、2:18-21）、ここではヨブ記の聖句がイメージされているようです。

**私は裸で母の胎を出た。また裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の名はほめたたえられますように。（ヨブ 1:21）**

ヨブの認識によると、所有物の一切は神からのものであり、時が来たらそれをお返ししなくてはならない。つまり、人間が地上で得るすべてのものは「借り物」であって、何一つ自分の身に永久に付帯させておくことはできないのです。私たちは生まれてくるとき、確かに何も持っておらず、まったくの無力な存在だったのではないのでしょうか。その後、成長し、多くの能力を身につけ、巨万の富を築いたとしても、死ぬときには生まれたときと同じように無力で何も持たない者となるのです。

このように考えていきますと、富というものは「一時的な所有物」であり、ほんの一瞬の間自分の手の上に置かれていたにすぎないものだという認識に至ります。皮肉なことに、富は生きている間には悩みの種となるのですが、それほど悩まされてきたものを最終的には手放さなくてはならない。だから、そのようなものにしがみつくとはやめなさいというのが、コヘレトの裏側からのメッセージなのです。

**これもまた痛ましい不幸である。人は来たときと同じように去って行くしかない。人には何の益があるのか。それは風を追って労苦するようなものである。（5:15）**

本節後半を直訳すると、「風のために労苦することに何の益があろうか」となります。

コヘレトは読者に暗に答えを求めている。「益はない」という返答を期待しています。風を追いかけても仕方がないでしょう？蓄財を人生の目的にすることは、永遠に捕えることのできない風を追いかけ続けるようなものなんですよと。

そうは言いましても、お金というものは私たちの生活にとって必要不可欠なものであるだけに、事はそう簡単ではありません。人が多く蓄えようとするところには、危機管理の意味もあるからです。収入が得られなくなる日がもしかしたらやってくるかもしれない。その日に備えて、蓄えられるうちに蓄えておこうと。しかし、その意識が行きすぎて、使うべきところにさえも投じないところに、目的の履き違えがある。お金は用いるために与えられているからです。

人は生涯、食べることさえ闇の中。いらだちと病と怒りは尽きない。(5:16)

ここでは富に人生の意味を求める人の到達点は希望なきゴールであるということが言われています。「闇の中」(γψηνυ／ベホーシエク)という表現は、富に没頭することが人生に陰鬱な影を落とすことを言い表しているのでしょうか。「いらだち」「病」「怒り」という三つの負の要素が、マモンへの献身には付きまとうというのです。

## 【結論】

では、私たちは富とどのように関わっていけばよいのでしょうか。主イエスの教えから。

群衆の一人が言った。「先生、私に遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」イエスはその人に言われた。「誰が私を、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」そして、群衆に向かって言われた。「あらゆる貪欲に気をつけ、用心しなさい。有り余るほどの物を持っていても、人の命は財産にはよらないからである。」そこで、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思ひ巡らし、自分の魂にこう言ってやるのだ。「魂よ、この先何年もの蓄えができたぞ。さあ安心して、食べて飲んで楽しめ。」しかし、神はその人に言われた。『愚かな者よ、今夜、お前の魂は取り上げられる。お前が用意したものは、一体誰のものになるのか。』自分のために富を積んでも、神のために豊かにならない者はこのとおりだ。」(ルカ 12:13-21)

主イエスの答えは、「神のために豊かになる」ということです。富を貸して下さっている神のためにそれを豊かに用いていく。富は必要なところに用いてこそ価値あるものとなります。富とは、賜物の一つであり、それをどう活用したかが主の御前で問われるのです。神のために用いられた富は、永遠に残るものとなるでしょう。そして、神はご自分のためにささげられたものを更に増し加えて、私たちを満たしてくださいませ。

## 【祈り】

人に富の管理責任を託し給う天の父なる神様。私たちに尊い使命を与えてくださっていることを感謝いたします。しかしながら、私たちは目的を履き違え、あなたのために用いるべき富を、自分のためにのみ用いようとする誘惑に常に晒されています。そして、知らずしてマモンの奴隷となり得る者です。主よ、私たちが与え主であるあなたを見失うことがないように、やがてお預かりしているものをお返りする日が来ることを念頭に置いて歩むことができるよう、お助けください。そして、ささげただけ更に多くを増し加えてくださるあなたの約束と御業を、確かにこの目で見ることができるよう。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
裸で生まれ来る人間に、一つひとつの賜物を与え、地上の生涯を楽しませ給う、父なる神の愛、  
神の前に豊かになる道を教え、富むところにも、貧しきところにも、神を礼拝する喜びを先立たせ給いし、主イエス・キリストの恵み、  
自らを神にささげ尽くし、再び何も持たぬ者として、主の御前に出で行かせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。